

外発的動機づけからみた教師の語りかけに関する調査研究

Study of Extrinsic Motivation —How Teachers Communicate with Children—

奥山 和夫 *
Kazuo Okuyama

新井 邦二郎 **
Kunijiro Arai

I 問 題

動機づけの研究は古い歴史をもっているにもかかわらず、その研究成果をふだんの授業に生かされることは比較的少なかったといえる。しかし、近年になってから、ようやくその成果を授業方法の改善に取り入れようとする機運が高まってきたことも事実である。

本研究は、授業改善、とくに学習意欲問題の研究に、これまでの心理学の研究成果を意識して取り入れて考えていくことにした。

ところで、学習意欲を高める手立てとして先ず授業者が考えておかなければならないことは、改めていうまでもなく、子どもたちをいかにして授業にもれなく参加させるかにあると言える。理由は『学習活動が起こらなければ学習効果はありえない』（渡辺秀敏，1978）という自明な理がそこに存在するからである。

ところが、ふだん子どもたちの学習活動を観察していると、決まって、ある子どもは教師が提示する課題に対して意欲的に取り組み、他の者はそうではないことに気づく。このような学習活動にみられる違いを説明する時の重要な概念が心理学でいう「動機づけ（motivation）」である。しかし、改めて「動機づけ」の意味を

考えようとする、これに関連すると思われる用語の数もかなり多く、したがって、その定義は明瞭であるとはいえない。

本研究は、動機づけの意味を、たとえば学習の場合で考えて、「子どもに学習行動を起こさせ、目標を追求させること」と理解し、そこに次の2つの要因を考えていくことにした。

1つは、「あの子は動機づけができています」という言葉がそれであるように、子どもの内部にすでに学習行動をかきたてる動機づけがあり、外部からはまったく動機づけの必要がない状態の意味に用いられるもので、内的動機づけと呼ぶ。他の1つは、「どうしたら子どもたちにやる気を起こさせることができるだろうか」という問題で、よく教師が頭を悩まし、そこで褒めたり叱ったりして外部からいろいろな手立てを講じ、子どもたちに学習を働きかける行為を意味するものである。「外的動機づけ」がそれである。

本研究は、言うまでもなく、子どもたちの学習意欲を喚起するには、なんといっても彼らを学習活動の起こりうる事態へ入りこませることが先ず大事であると考え、最終的には内的動機づけを重視することはもちろんであるが、そこに至るまでの外的動機づけの教育的効果を改めて検討してみようと、最初に子どもたちの意識

調査から手がけていくことにした。

II 研究の計画

外的動機づけには、外発的動機づけと内発的動機づけの2つがある。

前者の外発的動機づけとは、説明するまでもなく、褒めたり叱ったり、賞品や賞状を与えること等によって競争心をあおり、また、成績に順位をつけたり、特権を与えることなど、学習内容以外の刺激を用いて動機づけを強めることによって学習活動を引き起こそうとするものである。したがって、学習行動を引き起こす手段に過ぎない。それに対して、後者はそうした学習とは直接的に関係をもたない刺激によるのではなく、子どもの内に隠れ埋もれている知的好奇心や意欲などに訴えて、自発的に学習させようとするものである。

授業では、もちろん後者の内発的動機づけが重視されることはいうまでもないが、最初から内発的動機づけが成立するとは限らないと理解し、したがって、外発的動機づけの内容あるいは方法によっては、かなりの教育的効果も有りうると考えた。——このことに関しては、オールポート（Allport, G.W.）の“機能の自律”と呼んでいることにも類似していると言える。——

1 目的

学習活動（過程）の起こりうる事態に子どもを呼び込むのに役立つと思われる外的動機づけのうち、第2年次研究（内発的動機づけへの変容）につなげる意味からも、本年度は外発的動機づけの教育効果を子ども側から探ってみることにした。

2 研究計画

・第1年次……ふだん何気なく行っている教師の子どもに対する語りかけ（外発的動機づけ）の内容とその功罪、ならびに学習（授業）における子どもの意識について調査し、第2年次研究にむけての基礎資料とする。

・第2年次……学習過程の起こりうる事態に子どもを呼び込むための働きかけ（内発的動機づけの方法）について考え、その結果を、授業過程の再組織化に役立てる。そして、そのモデルを提案する。

III 研究概要

1 はじめに

最近の子どもたちは、なにごとにも、無関心・無気力・無感動である。世間はこのような事実を称して「三無主義」という。（さらに、無責任・無作法を加えて「五無主義」と言う場合もある）。いずれにしろ、何に対しても意欲や覇気が乏しいのが現代っ子の特質ではなかろうかと受け止める。事実、「どうしたら子どもたちに学習意欲をもたせることができるか」の問題で、教育現場における教師たちを絶えず悩ましてきている背景には、そうした現代っ子の性質が大きな原因となっているととらえておくことができる。そこで、以上のことを検証する意味からも何種類かの調査を実施した。次にその調査の結果と考察について記しておくことにする。

2 調査対象

以下記す調査は、いずれも埼玉県内の公立小学校5・6年生児童を対象に行ったものである。対象とした学校（地域）は、主に県の西部に位置し（東部、北部も一部含む）、最近急激に発展した都市にある。もちろん、学校の周辺には田園地帯がまだ多く残っている地域もあって、子どもの学力はいずれも中程度、親の子どもに対する教育の期待は大きい所でもある。

3 調査内容

- 調査1 学習に対する子ども関心度
- 調査2 授業開始直前の子どもの心境
- 調査3 算数の学習態度に関する子どもの自己評価
- 調査4 子ども側からみた「やる気」がでる教師の語りかけ、「やる気」を

失う教師の語りかけ

4 調査1 [学習に対する子ども関心度]

(1) ねらい

子どもたちは、学習することに対して、どの程度の関心度を持ち備えているか。

(2) 調査方法

実施時期：平成2年6月～7月

調査対象：埼玉県内公立小学校5・6年児童
(n=333)

質問内容：もし学校や塾がなくなり、勉強をしないですむようになったら、あなたはどうか。

調査手続：質問紙にある多肢選択法
クラス担任が調査を実施

(3) 結果および考察

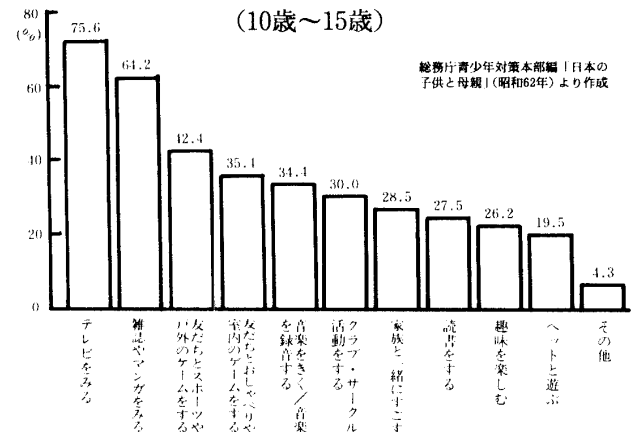
表-1 もし学校がなくなったら何をしたいと思うか

ア	毎日好きなことをして遊ぶと思う	36.0%
イ	何もしないでのんびり暮らしていると思う	1.5
ウ	家で親の仕事を手伝って暮らしていると思う	14.4
エ	学校のある国を探して行くと思う	8.2
オ	その他(一人で本を読んだり勉強する)	13.2
カ	わからない	26.8
合 計		100.0%

結果からも分かるように、37.5% (約4割) の子どもがアとイ (好きなことをして遊ぶ、のんびり暮らす) に反応を示した。これは子どもを取り巻く社会や生活の仕方が大きく変化し、そうした環境下での便利さと豊かさに対する甘えから生じたやむを得ない結果ではなかろうか、と思えてならない。このことについては、後のエ「学校や塾のある国を探して行くと思う」に回答を寄せた子どもが、たったの8.2%で、わずか1割にも満たなかったという結果からも推察することができる。では、子どもたちは学校に行く必要がなくなったら何をしようと考えているのだろうか、つまり何をしたいと思っ

ているのだろうか。このことについては、先に総務庁青少年対策本部が調査し、結果を「日本の子供と母親」(昭和62年)に発表しているので次に引用し、参考にすることにした。

表-2 <自由な時間の過ごし方>(n=1,741)



結果から言えることは、我々の先の調査では、「好きなことをして遊ぶ」「のんびり暮らす」に約4割の子どもがいたにもかかわらず、この調査によれば、「趣味を楽しむ」という者がわずか26.2%しかおらず、ほとんどの子どもが、「テレビを観る」「マンガを観る」、つまり部屋の中の孤独の時間を過ごそうとする者が多かった。換言すれば、遊びたいとおきながら遊び方を知らない子どもが多いのも現代っ子の特質の一つかとも言えるのである。こうした生き方の中で、果たして次代を担う人間が、この先、生きていく上でふさわしい場がもてるのだろうか。懸念されるところでもある。

5 調査2 [授業開始直前の子どもの心境]

(1) ねらい

まもなく(3分後に)授業が始まろうとしているとき、子どもは何を考えているか、どんな心構えで授業の開始を待っているだろうか、その心境について調べてみることにした。

(2) 調査方法

実施時期：平成2年6月～7月

調査対象：埼玉県内公立小学校5・6年児童
(n=104)

質問内容：これはテストではありませんから正直に教えてください。今、あなたの方の頭の中で思っていることは何ですか。

調査手続：質問紙による自由記述法

クラス担任が調査を実施

(3) 結果および考察：子どもたちの反応を整理したのが次の表である。

表-3 授業開始直前の子どもの心境

ア 今日の授業は何を勉強するのだろう	30%
イ はやく給食の時間にならないかな	18
ウ はやく授業が終わらないかな	16
エ はやく家に帰って遊びたいな	10
オ 体育の時間にならないかな(休み時間にならないかな)	9
カ その他	17
合 計	100%

結果から言えることは、一つは、授業を待つ子どもの心境は多様であったということ。二つには、その内容はともかく、まもなく始まろうとしている授業にかかわることを思い浮かべていた者は、わずか30%しかいなかったということである。換言すれば、残り70%の子どもは授業にはまったく関心を示していなかったということになる。もちろん、こうした結果は、どの授業どの教科にも当てはまるかどうかについては疑問もあるが、「馬を水辺に曳いていくことはできても、馬自身が水を飲もうとしなければ水を飲ませることはできない」の諺からも言えるように、教師は先ず子どもたちを授業にもれなく参加させる手立て（内発的動機づけ）を工夫しなければ、たとえ子どもたちが授業開始時に教科書を開いているからといって、熱を入れて授業を開始したところでどうにもならないのである。落語家は高座に上がると「まくら」から話を始めるが、これは今日の客の層は何かを知り、場合によっては話の進め方を多少変えても自分のペースに呼び込もうとするための、い

わゆる内発的動機づけである。授業の場合も同じである。子どもの興味・関心や能力がどの程度であるかを知り、その方向等に注意を払いながら授業の目標に向けて動機づけを図って行くことが大事だと言えるのである。

では、どうやって授業に関心を示さない残り70%の子どもを授業に参加させたらよいだろうか。その手立てについて研究しようというのが本研究の主たる目的である。したがって、本年度はそうした第2年次にむけてので基礎研究ということになる。

6 調査3 [算数の学習態度に関する子どもの自己評価]

(1) ねらい

子どもたちは、自分の学習の仕方についてどう思っているか。つまり、自らの学習の仕方に対する自信の程度について調べる。

(2) 調査方法

実施時期：平成2年6月～7月

調査対象：埼玉県内公立小学校5・6年児童
(n=333)

調査手続：質問紙による2件強制選択法

クラス担任が調査実施

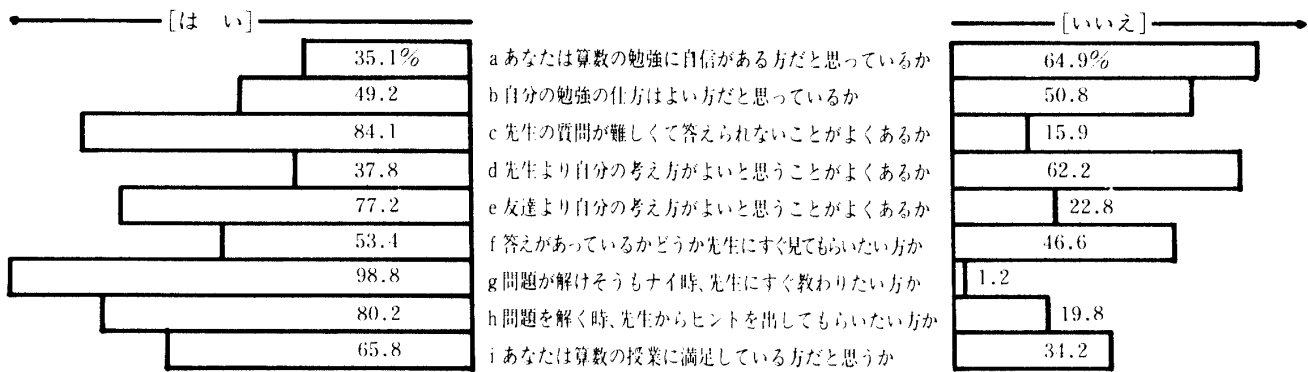
(3) 結果と考察

調査は、強制選択法を取り入れた。結果は次の通りであった。

まず、問題視しておかなければならないのは質問aの結果である。

「算数の勉強に自信がない」と応えた子どもの数(64.9%)は偶然にも先の「表-1」のa以外の項の合計と数値(70%)があまりにもよく似ていたことである。ということは、勉強好きにするか嫌いにするかの原因の一つに、学習の仕方に対する自信の有無(勉強の仕方が分かっているかいらないか)が関係してくるのではないかと読み取れる。このことについては、さらにbの質問で、50.8%の者が自分の勉強の仕方をよくないと思っていること、また、cの質問で84.1%の者が教師の質問に答えるのが困難だと思いながらも授業に参加しているということ

表－4 自分の学習の仕方に対する自信の程度



等からも十分推察できる。ということは、子どももの学習に対する悩みを解消する努力もはらわずに、ただ教師一人よがりの授業をしていたのでは、先の調査結果ではないが、学校が消えて無くなることを願う子どもがますます多くなるのではないかと心配されてならない。教師は子どもたちを教師の元に早急に呼び戻す手立てを考えていく必要がある。

次に問題視しなければならない点は、ほとんど全員に近い子どもが、質問gで「問題が解けそうもないとき、先生に直ぐ教わりたいと思う」にYes反応を示していたことである。したがって、ここで考えられることは、授業過程におけるフィードバックの仕方、ならびにKR情報の手法について教師は反省する必要がある。

最後に気になる反応結果は質問iである。「算数の授業に満足している方だと思うか」の質問に、一応「満足している」と応えた者が、65.8%とかなり多かったが、たまたま調査の実施者が担任教師でもあり、したがってある程度の社会的望ましさが加味されての現れではなかったかとも思える。実際は、「満足している」と思っている子どもの数は、かなり減るのではないだろうか。いずれにしろ「満足していない」と応えた者が34.2%（約3割強）いたという事実は教師として反省しなければならない。そこで、次に「満足していない」理由に何があるかについて追跡調査を試みた。結果は次の「表－5」に示した通りである。

表－5 授業に満足しない理由

ア 授業の内容が面白くないから	16.9%
イ 授業の内容が難しくよく理解できないから	46.1
ウ 先生の教え方が難しくよく分からないから	25.6
エ 予習や復習をしてこなかったから	7.8
オ その他	3.6
全 体	100.0%

ア＋イ＋ウの合計つまり授業内容と方法（教え方）を、満足していない理由にあげていると思われる者が88.6%いた。ここでも、この数字が先の「表－1」の70%とよく似ているのに気づく。なお何人かの子どもに対して口頭でさらに尋ねて分ったことだが、調査では、ウ「先生の教え方が難しいから」という表現をとって見たところ、子どもの本音は、「先生の教え方が難しいから……」ではなくて、むしろ「先生の教え方が下手だから」と言いたかったようである。そして子どもたちは続けて言う。「塾の先生の方が教え方がうまい」「だから僕たちは塾へ行く。そして学校で分からなかった所を教えてもらおう」と。また、ある子どもは「担任がかわれば、授業も楽しくなるだろう」と言っていた。

仮に、子どもたちの言うことが本音であるならば、塾へ行くことによって学校離れ、教師離れをしようとしている子どもたちを、なんとかわれわれの元に戻す手立てを講じなければならないだろう。強く反省させられる。

7 調査4 [子ども側からみた「やる気」 がでる教師の語りかけ、「やる気」を失 う教師の語りかけ]

(1) ねらい

子どもへの何気ない語りかけが、彼らの意欲を如何に喚起し、あるいは失わせるかについて調べ、授業における外的動機づけの改善にむけての基礎資料を得る。

(2) 調査方法

実施時期：平成2年6月～7月

調査対象：埼玉県内公立小学校5・6年児童

(n=333)

調査問題：先生から次のような言葉をかけられたら、あなたは「やる気」がでますか。「やる気」がでると思う言葉は○、なくすと思う言葉には×、どちらとも言えないと思う言葉には△を、書きなさい。

調査手続：質問紙による。担任が調査実施

(3) 結果と考察

○反応と×反応だけをグラフに表す。

表-6 「やる気」がでる語りかけ・「やる気」を失う語りかけ (n=333)

	やる気のでる	語りかけ	やる気を失う
A	59.0%	2 できたら褒美をあげよう	12.0%
	36.2	13 勉強しないとクラブを止めさせるぞ	37.2
B	15.7	1 できれば、もうしなくてもよい	48.4
	11.1	12 できれば止めてしまえ	60.6
	91.2	10 もう少しだから頑張れ	1.9
	41.3	16 最後までやりなさい	28.7
	75.3	29 できるところまでやりなさい	5.3
	40.4	24 間違えないようにやりなさい	20.7
	70.6	37 間違えてもいいから、やってごらん	10.6
	12.8	22 まだできないのか。早くやりなさい	65.4
	64.9	35 時間はまだあるから落ちついてやりなさい	1.8
	24.7	6 こんなことは幼稚園の子でもできるぞ	61.8
C	26.7	7 できないのはお前だけだ	51.6
	13.0	11 男(女)のくせに駄目じゃないか	60.1
	54.0	3 こんなことができないと恥ずかしいぞ	25.5
	11.2	4 どうしてできないのかな	60.9
	52.9	5 できないと大人になってから困るぞ	21.0
D	14.8	15 一人で考えなさい	61.7
	66.8	28 先生が見ていてあげるから考えなさい	11.7
	43.9	26 わからなかったら先生に聞きなさい	47.6
	29.6	39 わからなかったら友達に教わりなさい	29.8
E	90.2	8 やればできるじゃないか	2.9
	8.2	9 できているが、まぐれじゃないだね	67.8
	13.6	17 本当にやる気があるんだろうね	62.8
	87.6	30 やる気を出せば必ずできるようになる	2.9
	9.3	14 なんと教えたかわかるようになるのか	68.1
	14.7	20 こんな成績しかとれないのか。情けない	67.8
	50.0	33 頑張れば、もっとよい点がとれるはずだ	16.2
	7.4	18 どうしてお前は頭が悪いのだろう	78.5
	61.7	31 お前は頭がいいぞ	7.7
	84.9	23 よくできたね(うまくできたね)	5.1
	92.3	36 よくできた。次のテストも頑張れよ	1.6
	14.4	27 こんな考え方しかできないのか	59.3
	60.9	40 もっとよい考え方はないか、考えてごらん	9.3
	20.7	19 前にもこれと同じことを教えたはずだぞ	45.5
	58.2	32 前に勉強したことを思い出してごらん	10.1
	17.3	21 勉強しないと高校に行けないぞ	50.0
	47.3	34 高校に行きたくないから勉強しないのだな	23.1
	11.4	25 テレビばかり見ていないで勉強しなさい	51.8
	52.1	38 勉強したくないのなら、テレビを見なさい	9.8

① [A 領域] 考察

金銭、物等の報酬を得られることによって、「やる気」がでると回答した者が59%もいたことから、「やる気」の強さは発達段階によって報酬内容の選択に違いはあるかも知れないが、報酬の有無に左右されるということが推察できる。報酬の内容として考えられるものに、お金や品物以外の賞状、成績に順位をつける、特権をあたえる等が考えられる。

② [B 領域] 考察

項目12と22の「やる気がなくなる」に半数以上の者が反応を示したのに対して、項目10,29,35,37は逆に「やる気がでる」と約70から90%の者が反応を示していた。こうした反応結果（傾向）から考えられることは、攻撃的・批判的（項目22,24）あるいは憎悪的、敵意的な語りかけ（項目1,12）は「やる気」を失わせるということである。逆に、成就欲求・達成欲求（項目10,35）または安全欲求・尊重欲求（項目29,37）等につながるとされる語りかけは、いずれも「やる気」の動機づけとなっていることも結果から読み取れる。

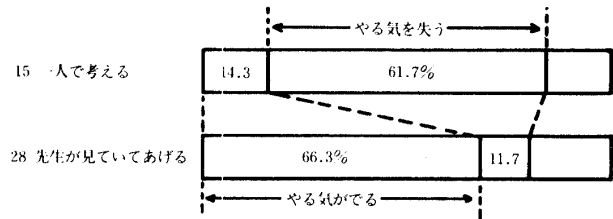
③ [C 領域] 考察

ここでは、項目3,5以外はどの項目も半数以上の者が「やる気」がなくなると応えていた。その理由の一つに、人間は誰もが自分を正当化しようとする気持ちがあるからがあげられよう。こうした傾向は、項目6,7,11の結果でも言えるように、友達や兄弟（特に弟妹）と比較されることでプライドが傷つけられたり、差別されることによって、感情的、反発的な行動に走る子どもが多いということからも考えることができる。

④ [D 領域] 考察

この領域の反応傾向から分かることは、子どもたちが抱えている不安に対して解消に役立たない語りかけは、かえって「やる気」を喪失させるということである。たとえば、項目15と項目28の結果を比較して分かるように、自分一人で学習している時よりも、傍らで教師が見ていてくれると思う時の方が安心して学習できると

いう子どもが多いということである。



⑤ [E 領域] 考察

なかでも、項目8と9を比較して明らかになったことは、子どもにとって、自己実現（成就・達成）の充足に役立つと思われる教師の語りかけは「やる気」を出させるのに有効であるということ。このことは、たとえば項目23,36を比較して分かるように、結果を評価する言葉（「よくできた」）だけでなく、「よくできた。次のテストの時も頑張れよ」とか「よく読めたね。この次ぎにはもっと大きな声で読むと、もっと上手になるよ」と言うように、

「結果の評価」＋「次への努力目標」

の形で語りかけた方が、彼らの達成動機をゆさぶることになり、「やる気」はいっそう強く動機づけられことを示していると解釈できる。

⑥ 総括的考察

調査(4)では、さらに「とくにやる気がでると思う言葉」を3つ、「やる気を失うと思う言葉」を3つあげてもらい、結果をそれぞれ上位5項目をまとめたのが次頁の表-7、表-8である。

a とくに「やる気」がでる言葉

「とくにやる気がでると思う言葉」で言えば、特徴は項目2の結果にみる男女差にかかわる言葉である。

男子の場合、項目2を「やる気がでる」の第一位にあげていたのに対して、女子は（表に示していないが）第七位であったということ。これは褒美がもらえるから勉強するという考え方は精神的にも子どもであると理解しておくならば、男子の方が女子よりも成長がやや遅れているからではないかと読み取ることができる。

全体的には、「やればできるじゃないか」「よくできた。次のテストのときもがんばれよ」が、特に「やる気」を起こすのに効果的であろうと考察できる。

表-7 とくに「やる気」がでる教師の語りかけ

男	①	2	できたら褒美をあげよう	37.1%
	②	8	やればできるじゃないか	30.9
	③	36	よくできたね、次のテストも頑張れよ	28.9
	④	30	やる気をだせば必ずできるようになる	26.8
	⑤	10	もう少しだから、頑張れ	23.7

女	①	8	やればできるじゃないか	42.3%
	②	36	よくできたね、次のテストも頑張れよ	37.9
	③	10	もう少しだから、頑張れ	34.1
	④	30	やる気をだせば必ずできるようになる	29.7
	⑤	23	よくできたね(上手にできたね)	24.7

全	①	8	やればできるじゃないか	35.3%
	②	36	よくできたね、次のテストも頑張れよ	33.2
	③	10	もう少しだから、頑張れ	28.7
	④	30	やる気をだせば必ずできるようになる	28.2
	⑤	2	できたら褒美をあげよう	26.6

b とくに「やる気」を失う言葉

次に「やる気を失う言葉」の上位5位について考えてみる。

表-8 とくに「やる気」を失う教師の語りかけ

男	①	18	どうしてお前は頭が悪いのだろう	49.6%
	②	6	こんなことは幼稚園の子でもできるぞ	28.7
	③	9	できているが、まぐれではないのか	25.1
	④	20	こんな点しかとれないのか、情けない	21.1
	⑤	17	「やる気」があるのか	17.5

女	①	18	どうしてお前は頭が悪いのだろう	41.8%
	②	9	できているが、まぐれではないのか	32.4
	③	6	こんなことは幼稚園の子でもできるぞ	30.2
	④	20	こんな点しかとれないのか、情けない	25.8
	⑤	22	まだできないのか、早くやりなさい	17.0
子	⑥	7	できないのはお前だけだ	17.0

全	①	18	どうしてお前は頭が悪いのだろう	44.4%
	②	6	こんなことは幼稚園の子でもできるぞ	27.9
	③	9	できているが、まぐれではないのか	27.9
	④	20	こんな点しかとれないのか、情けない	21.1
	⑤	22	まだできないのか、早くやりなさい	16.0

上位5位(ワースト)の中には、男子にみられて女子にみられなかったのが項目17である。理由は、頭から押さえつけられたと受け止められるような言葉に対しては、どちらかと言えば、男子は反発的受け止め方を示すからだと解釈しておくことができそうだ。また逆に、女子にあって男子にみられないのが項目7である。これは、女子がもつ他者比較に対する反発力の強さを示すものと判読しておくができる。

8 全体的考察と課題

(1) 現代ほど学習意欲を高める動機づけとしての外的な内容と方法、なかでも学習意欲を高めようとする時の初期ならびに途中の段階における教師の語りかけの内容と表情が、いかに影響を及ぼすかについて、総合的に考察ができた。

(2) 調査1では、仮に学校がなくなって勉強をする必要がなくなったらと思うかの質問に対して、「毎日好きなことをして遊ぶと思う」「何もしないでのんびり暮らしていると思う」に反応を示した者が約40%と最も多く、逆に、学校がなくなったら仕方がないから「学校のある国を探して行くと思う」に応えた子どもは、たったの8.2%しかいなかった。その理由は、小ささまざまあろうが、例えばその一つに、これまでは知識を得る所は学校と決まっていたのが、最近は学校以外の所でも十分得ることができるという気持ちが子どもだけに限らず親にも受け止められてきているからではないか。

このように子どもを取り囲む環境の中で、学校教育は学校離れをしていく子どもたちを、もう一度学校に呼び戻す手立てを考えていかなければならないだろう。そのためには、授業は認知的側面だけではなく、情意的側面をも重視し

た授業を取り入れるなどして、魅力ある授業を創造していく必要が強く考えられる。

(3) 調査2では、まもなく始まろうとしている授業を子どもたちはどんな心境で待っているかについて知ろうと、行った調査である。結果は、調査1をよりはっきりと裏づけることになった。つまり、授業に関する事を一応思い浮かべていたと思われる子どもは、わずか30%にとどまり、他の残り70%の子どもは、授業以外のことを考えていて、授業には全く関心を寄せていなかったと言うことである。(もちろん、この結果はどの授業時間、どの教科にも当てはまるとは決めがたいが。)

要は、子どもたちのその場における勝手な気持ち、速く学習意欲に変容させる努力が必要であり、また重要だと言えよう。そのための手立ての一つとして、外的機動づけのあり方の再認識が必要と言える。

(4) 調査3では、算数の学習に対して子どもたちはどの程度自信をもって授業に参加しようとしているかを調べた。結果は、自信を持っている子どもは意外に少なかったことが分かった。したがって、教師は予定された指導内容を終わらせることに終始するのではなく、例えば、机間指導やノート(作業過程)検査をマメに実施し、子どもたちの躓きに対して早期発見し、その手立てを講じる必要がある。ここでも教師の語りかけ(その時の教師の表情も含む)が大きく影響してくるものである。

(5) 最後の調査4では、以上(1)~(4)の検証をねらいとして、ふだん教師が子どもたちの指導過程で与えていると思われる語りかけ(褒め言葉、励ましの言葉、叱る言葉)を具体的に彼らに提示し、学習意欲の喚起とどのようなかわりがあるかを調べてみた。結果は、改めて言うまでもないが、教師の言葉のニュアンス、その時の教師の表情等によって、学習意欲を高めるのに大きな影響を及ぼしていることが分かった。特に、共感的・承認的語りかけは学習意欲を高めるのに極めて有効であること。また、結果だけをその場で評価するのではなく、次に何をす

ればさらに上達するであろうと、達成動機を喚起するような語りかけは極めて有効であることが分かった。

(6) 今後の課題

学習意欲を活発にしようとする場合、子どもたちの積極的エネルギーが減退あるいは失われている状態にある間は、教師はどんなに教育的刺激(学習課題)を与えても、学習意欲は期待できない。換言すれば、授業とは内発的動機づけを重視することは言うまでもないが、だからと言って、即、知的好奇心がゆさぶると言われるような課題を彼らに提供しても、子どもたちにそれを受け入れる心の余裕が出来ていなければ焼け石に水と化してしまうことにもなりかねない。教師はとにかく自分が予想する反応(行動)との間にズレを見い出したり、好ましくない行動を子どもの学習活動に気づくと、これを否定することに終始しがちである。これではいけない。

第2年次は、子どもの心の余裕、つまり情意になるものを大事にした動機づけの在り方について検討し、個性教育にむけて、さらに検討していきたいと考えている。

最後に、本研究の調査に協力していただいた関係機関、学校、先生方に謝意を表したい。